

幸子の映画

食べある記



★「宮廷料理人ヴァテール」★

十七世紀に実在したフランスの宮廷料理人フランソワ・ヴァテール。最後の仕事になったルイ十四世を招くシャンティー城での三日間の饗宴と隠された愛と陰謀を描いた一大スペクタクルドラマです。

菓子屋で修行を始めたヴァテールはその才能を認められて二十二歳で宴の総てを取りしきる総責任者に任命されて能力を発揮します。

お菓子に使われるクリーム・シヤンティー（ホイップクリーム）の考案者でもあります。

時は太陽王と言われたルイ十四世が隆盛を極めていた一六七一年。国王ルイ十四世の信頼を取り戻すためにシャンティー城主コンデ大公は避暑に来るというヴェルサイユ宮殿の五〇〇人を越す人の饗宴

を計画。総責任者に任命されたヴァテールは、国王を魅了するため三日三晩の祝宴を取り仕切ります。今年の七一回アカデミー賞「美術部門」で大賞を受賞した映画

です。その華やかさ贅沢さは一回で見るとはもったいないほどの豪華さと美しさ、料理をやっている者にとってはコマごと写真に撮りたいくらい。映画製作費は四〇億円と言いますからセットで「テーマパーク」が出来そうなスケールです。当時莫大な借金まで使ったお金は、当時の国家税収の一四〇分の一。三日間の宴会は現代の日本円に換算すると三兆五七一四億円に匹敵するそうです。一度失った信用を回復させるため、国王を魅了し驚嘆、満足しても

らおうとはいえ、今では想像を絶するお金の使い方をしたものです。

中世ヨーロッパの文化に触れるたびに、大勢の国民の貧しい生活と極端な贅沢が見えます。今に残る文化遺産もいまでは建設不可能と思えるほどの資金が使われています。洋の東西を問わず社会が未熟なときは生活レベルの格差が大きいと言えるでしょう。

今となっては自国のことのみならず、世界的な見地からその国の有りようにも影響する時代になりましたので、平等とまでは行かなくても社会主義的な世界が進みつつあって、それが成長した人間社会というものでしょうか。喜ぶべきことでしょうか、かつてのような壮大な物は出来てこない、と思うと寂しい気もします。



クッキングキャスター

星澤 幸子

text : Hoshizawa Satiko

ともあれ史実に基づいて作られたこの映画。贅の限りを尽くしています。一日目は「太陽の栄光」二日目は「水の饗宴」三日目は「水の饗宴」と銘打ち、ヴァテールは祝宴をデザインします。料理のみならず美術にも才能を発揮して総合指揮官として、予定通の成果をもたらす国王から天才だとの評価を得ます。それにしても多くの使用人が居たとはいえ五〇〇人の宴会を一人で仕切る器量があった



ことに驚きます。

しかし、国王とコンテ大公のゲームにヴァテールを賭けられたことを知って嘆き悲しみます。更に完璧な準備にもかかわらず、三日目の魚が届かないことが引き金と成ったのか、わずかに届いた「カニ、ロプスター、カキ」そして赤ワインを自室に持ち込み自殺するのです。直後に魚はふんだんに届き弟子達によって宴は無事終わります。

最高の立場におかれそれなりの成果を残しながらも、使用人としての域を出なかつたこと、忠誠心を誓った大公に賭けに出されたことがヴァテールを絶望させたと思



います。もしそれがなかつたらヴァテールほどの腕の持ち主、ほかの食材で見事な料理に仕上げたことでしょう。

自分が今ある立場を努力の成果と思つても、社会の歯車の中では誰でも代用が効く、小さなコマに過ぎないのかもしれない。

この映画でもうひとつ興味があつたのは「通風」です。贅を尽くした食事の結果は自身の体にきますから、大公が通風の為に赤く腫らした足を痛そうにしているのを見るに付け「食事は粗食にしよう。」とあらためて思いました。



幸子の

映画食べある記